

蒼井村正

表紙イラスト／或十せねか

二次元ポチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

カースイーター  
呪詛喰らい師外伝

餓 神 乳 辱

前編

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『呪詛喰らい師外伝 餓神乳辱 前編』  
『呪詛喰らい師外伝 餓神乳辱 中編』  
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『呪詛喰らい師 1～3』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



カースイーター  
呪詛喰らい師外伝

餓 神 乳 辱

前編

蒼井村正

表紙イラスト／或十せねか

## 登場人物紹介

### Characters

---

ときわぎ さき

#### 常磐城咲妃

「呪詛喰らい師」という異名を持つ少女。幼いころから退魔師としての修業を積んでおり、淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。封じた淫神の力は使うことが可能。

ゆきむら ゆか

#### 雪村有佳

咲妃のクラスメイト。淫神に取り憑かれたところを咲妃に救われて以来、レズ友達として愛しあっている。

るな

#### 瑠那・イリュージア

霊を操る術を得意とする魔術結社「レメゲトン派」の生き残りの少女。かつて咲妃を襲撃したが返り討ちに遭い、仲間になった。

いわくらしんじ

#### 岩倉信司

都市伝説研究部の部長。様々な怪異を追っているうちに、淫神の事件に巻き込まれる。

常磐城咲妃が都市伝説研究部の部室を訪れると、部長の岩倉信司は、既に部屋で待機していた。

「やあ、信司」

「あ、ああ。今日は一人？」

咲妃の挨拶にパソコン画面から顔を上げた少年は、彼女が一人なのを確認すると、強ばった笑みを浮かべる。

「うん。有佳は生徒会の仕事があつて、瑠那は補習授業だ……」

言葉少なに告げた咲妃は、テーブルを挟んで信司の斜め向かい椅子に着席し、卓上に置いてあつたオカルト情報誌をぱらぱらとめくって見た。

「あ……そうか……じゃあ、もうちよつと待つか……今、調べ物してるんだ」

明らかにぎこちない口調で言った信司は、ノートパソコンの画面に視線を戻して黙り込んでしまう。

（久遠の世界で、呪印術で封じていた記憶を一気に思い出させてしまったからな……自己嫌悪に陥るのも理解できるが、このギクシャクした空気は苦手だ……）

よそよそしい態度の原因を察している咲妃は、むつつりスケベなくせにフェミニストな少年を、憂いを含んだ視線で見つめながら思う。

深夜の公園で出会って以来、咲妃と信司は、淫神を巡る様々な事件に遭遇してきた。

都市伝説マニアの少年は、ある時には操られて咲妃の身体を嬲り、またある事件では、金縛り状態にされて、淫神に辱められる彼女の痴態をなすすべもなく見せつけられた。

そのたびに、罪悪感と無力感に苦悩する信司の様子を見かねた咲妃は、精神操作系の呪術である呪印術を使い、彼の記憶を封じてきたのだ。

しかし、数週間前、異能の術者集団、九未知会によって拉致された咲妃を救うため、危険を顧みずに亜空間にまでやって来た信司たちは、九未知会の盟主、常磐城久遠によって、記憶の封印を解除されてしまった。

更に、蘇った記憶に苦悩する信司は、咲妃に対して抱いていた淫情を触媒として、ペニス状触手を持った亜神を憑依させられてしまう。

亜神化した信司は、欲望に屈して呪詛喰らい師を激しく陵辱し、救出に来たはずの親友を陥落寸前まで追い詰めたのである。

フェミニストの少年は、そのことを未だに悔やみ続け、激しい罪悪感と自己嫌悪に責め立てられていた。

（今の信司に慰めの言葉をかけても逆効果だろうな。かくいう私も、あの時のことを思い出すと……身体が疼いて……。お互い、色々と引きずってしまっているな）

亜神化した信司と交わった時の背徳的な快感を思い出し、子宮が甘く妖しく疼くのを感じつつ、呪詛喰らい師の異名を持つ少女退魔士は、悩ましがな吐息を漏らす。

後にも先にも、男性のペニスをヴァギナに受け入れ、射精まで許したのはあの時の交わりだけである。咲妃にとっても、そう簡単に気持ちの整理が付かぬ体験であった。

気まずい沈黙が続くこと十数分、補習授業を終えた瑠那・イリユージアがやってきた。

「咲妃お姉ちゃん、お待たせ〜♪ 補習授業頑張ったよ。テストも満点だった」

部室内に漂う重い空気に気付いたらしい金髪少女は、ことさら甘えた声を上げて擦り寄ってくる。

「お帰り、おいで、瑠那、褒めてやろう」

小さく安堵の吐息を漏らした咲妃は、瑠那の小柄な身体を胸元に抱き寄せ、頭を撫でてやる。

「んふ……嬉しい……」

可愛らしく鼻を鳴らした瑠那は、たわわなバストに頬ずりして子猫のように甘えた。

今でこそ咲妃にぞっこん惚れ込み、なついている瑠那であるが、実は凄腕の死霊使いであり、かつては咲妃を下僕化しようと狙ってきたこともある。

（私を陵辱し辱めようとした瑠那とも、今はこうして愛し合っているんだ。信司とも、必ず以前のような関係をとり返せる……）

金髪少女の小柄な身体を抱き寄せながら、都市伝説マニアの少年に視線を送った呪詛喰らい師の表情が曇る。

（私の胸を盗み見もしないのか？　これは相当重症だな……）

以前なら、瑠那の頬ずりでムニムニと柔らかくたわむ爆乳をチラ見していた信司が、今は頑なに視線を逸らし、パソコン画面をにらんでいる。

「遅くなってすみません」

「新学期早々だから、書類仕事がいっぱいだったのよ」

数分遅れで、生徒会で書記を務めている雪村有佳と、生徒会長の稲神鮎子もやってきた。「よし、みんなそろったところで始めようか。さっそくだけど、これを見てくれないか？　昨日の新聞記事なんだが……」

パソコンとのにらめっこをようやく終了した信司は、新聞記事のコピーを表示させる。

「『これは霊の祟り？　山奥の幽霊レストランで肝試し中の若者集団が次々にダウン』フン、ただの熱中症でしょ？」

咲妃の爆乳に頬ずりしつつ、横目で記事の見出しを読んだ瑠那が鼻でせせら笑う。

「ところが、熱中症じゃなかったんだ。病院に搬送された連中の診断結果は、原因不明の肉体衰弱……中には、数日間断食したみたいに衰弱しきっていた人もいたらしい」

金髪少女の頬ずりに揺れたわむ呪詛喰らい師の胸から強引に視線を逸らしつつ、信司が解説する。

「へえ……時間経過も忘れて乱交パーティーしてて、体力尽きただけじゃないの？」



無言のまま思案している咲妃の代わりに、瑠那が下ネタを口にした。

「なっ……瑠那さん！　なんてはしたくないことを……」

有佳が慌ててたしなめるが、信司と鮎子は顔を引きつらせて沈黙するばかりで、ろくにリアクションもできない様子だ。

（ふむ……信司ほどではないが、鮎子もエロいことに対して色々と負い目を感じてしまっているみたいだな……猥談もできないこんな雰囲気は、調子が狂ってしまう）

幼なじみである信司に恋心を抱いている鮎子も、咲妃に対して抱いていた嫉妬心や劣等感を久遠の術によつて増幅され、サディスティックに責め立てたことに後ろめたい思いを抱いているようだ。

（呪印術で記憶を封じれば、とりあえずの解決は可能だが、度重なる記憶の改ざんは色々とお悪影響もあるからな……それに、もう、安易なこととはしないと決めたんだ！）

九未知会絡みの一件で、絆の力を痛感した呪詛喰らい師は、呪印術に頼らず、現実と向き合い解決することを選択していた。

今のギクシャクした状況は、各々が負ってしまった心の傷や罪悪感を払拭する上で、どうしても避けて通れない過程なのだ。

「ゴホンッ……で、問題の廃墟レストランは結構有名な心霊スポットなんだ。少し遠い山の中にあるんだけど、以前から調査に行きたいと思っていたんだよ。今度の休日に行つて

みないか？」

わざとらしい咳払いで強引に話題を戻した信司は、用件を切り出す。

「それは許可できないわね、不法侵入で警察に捕まったら、停学になっちゃうわよ！」

オブザーバー名目で部活に参加している生徒会長、鮎子が即座にダメ出しする。

「大丈夫だって！ 警察のパトロールも、そんなに頻繁に通るわけでもないし、少し手前のバス停で降りて、裏山側から侵入すれば……」

「却下よ！」「ダメだ！」

鮎子とほぼ同時に、それまで沈黙を守っていた咲妃も、強い口調で言い放った。

「う……で、でも、最近は、部室で雑談してばかりで、都市伝説研究部らしいことは何もやってないじゃないか。そろそろ実地調査ぐらい行かなきゃ！」

女性二人に威圧されながらも、信司は未練がましい口調で抵抗する。

「ダメだ！ ……興味本位で心霊スポットに行くのは止めた方がいい。それに、鮎子が言うように、今は現場周辺が色々騒がしいだろう。とにかく……ダメだ！」

「わかったよ。じゃあ、この件の実地調査は諦める……。抜け駆けも絶対にしな！」

咲妃と一瞬目を合わせ、小さなため息をついて目を伏せた信司は、意外なほどあっさりと引き下がった。

そんな幼なじみの様子を、鮎子は何か言いたげな表情で見つめていたが、結局、沈黙を

押し通す。

その日の部活も、ネットに流布している怪奇情報探しと、それをネタにしたとりとめのない会話だけで終了し、解散となった。

「……さっきのダメ出し、咲妃さんらしからぬ切れの悪さでしたね」

夕闇迫る道を、咲妃の自宅マンションに向かって歩きながら、有佳が話しかけてくる。

「そうかな？」

「信司と鮎子が悪いのよ！ 何だかオドオドしてて、お姉ちゃんのこと怖がつてるみたい。あんな雰囲気じゃ、お姉ちゃんもエッチなこと言えないよね？」

「怖がつているわけではないと思うが……」

瑠那の指摘に苦笑する咲妃。

「まあ、信司や鮎子にも、色々と思う所はあるんだろう。私もしばらく猥談は自重するさ。いづれ……気持ちに折り合いが付く。きつと……」

自分に言い聞かせるようにつぶやきながら見上げた空には、満月が白く輝いていた。

シャアアアアア。

五月雨のように降り注ぐシャワーの湯滴が、絡み合う裸身に弾けている。

バスルームの床で、一糸もまとわぬしなやかな裸身を融け合わんばかりに擦り合わせて

いるのは、三人の少女たちであった。

バスルームの床で仰向けになった咲妃の両側に、有佳と瑠那が添い寝する形で、愛撫を仕掛けている。

「んっ、あ……あはあ……あんッ！」

極上のプロポーシオンを誇る裸身を撫で回され、舌と唇を駆使して舐めしゃぶられた咲妃は、悩ましげな喘ぎを漏らし、込み上げる快感に美貌を歪める。

恍惚の表情を浮かべた顔や、桜色に上気した素肌にまとわりついた濡れ髪がエロチックだ。

「んふ……咲妃さん、また敏感になっちゃったんじゃないですか？」

同性の恋人に添い寝し、仰向けになっても形の崩れぬ豊乳に顔を寄せた有佳は、歓喜に震える裸身を撫で回しながら、色白な乳肌と、透明感のあるピンク色をした乳輪の境目に優しく舌尖を這わせる。

「んひッ！ ふあ……あ、はああううう……んッ！」

ソフトタッチのキスで乳肌や勃起乳首をついばまれ、絶妙の力加減で甘噛みされた咲妃は、有佳の問いに言い返すこともできず、甘い喘ぎを浴室に響かせるばかりである。

「ちゅぱ……フフフッ、お姉ちゃんの乳首、硬くなってピクピク震えてるよ。ねえ、もう、イッチャいそうなんでしょ？ ガマンしないで、イッチャっていいよ」

さんざん吸いしゃぶっていた乳首から唇を離れた金髪少女、瑠那が、張り詰めた咲妃の爆乳を小さな手で揉みこねつつ、小悪魔の微笑みを浮かべる。

「そうですね。咲妃さん、遠慮せずにイッて下さい……」

両手の指で量感たつぷりの乳肉を両手でこね回しながら、慈愛に満ちた声で告げた有佳の唇が右乳首に吸い付き、リズムカルに吸引する。

柔らかな唇に、乳輪ともども吸い込まれた勃起乳頭が甘噛みされ、温かな唾液にぬめった舌に舐め転がされて、気が遠くなるような悦波を発生させた。

「お姉ちゃんのオッパイ、ガマンできないぐらい気持ち良くして上げる！」

瑠那も、負けじと左乳首をきつく摘み、小さなペニスの様に扱いて責め立てる。

白い指に挟まれたフレッシュピンクの勃起乳頭を摘み揉まれ、引っ張られる反動で、たわわなバストがタプタプと揺れ弾んだ。

「んあ、あはああ……瑠那……有佳ああ……」

感極まった声を上げた咲妃は、二人の頭を胸元に抱き寄せ、メリハリの利いた美裸身を喜悦に振らせる。

「お姉ちゃああん……」

「んふ、咲妃さん……大好きです」

二人の愛撫が激しさを増した。

ぷしいいっ！　ぷしゆるるるるうううッ！

「んぐ……ぶほっ！　ゴホ、ゴホ、ゴホ……んじゆるるるるうううッ！」  
ビクビクと震える勃起乳首から勢い良く迸った温かい乳汁が、唇の端から噴き出し、喉奥を直撃された男が咳き込む。

「このお！　いつまで独り占めしてんだヨオ！　替わってヨオ！」

夢中になって母乳を吸っている巨漢を強引に押しつけたピアス少女が、まだ射乳を続ける乳首にむしゃぶりつき、欲望のままに吸い上げる。

「んふ、ちゅばちゅばちゅば……おいひい……あむ、はむ……んんんッ！」

少女はピアスで飾り立てられた顔に法悦の表情を浮かべ、肉厚な唇をすぼめて乳首吸引を強めた。

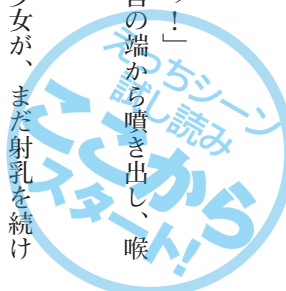
「あああ！　また、出るッ！　舌が……ピアスが擦れて……あひいんッ！」

舌に施されたダンベルパール型ピアスが、勃起乳首の先端をコリコリと舐め弾く硬質な刺激に、乳汁の射出が勢いを増す。

「あはあ、出たあ……ちゅばちゅばちゅばちゅばんじゆるるるるうううッ！」

歡喜の声を上げたピアス少女は、ドングリをかじるリスのように咲妃の乳房を両手で掴み、はしたない吸い音を立てながら、止めどなく湧き出す滋養のエキスをすすり込む。

（神伽の効果は上がっている……だが……予想以上に消耗が激しい）



乳悦に汗ばみ紅潮した咲妃の顔に、かすかな不安の影が差す。

好き放題に母乳を吸わせているうちに、乳房の芯に重い痺れのような疲労感が蓄積し、分泌量が明らかに低下しているのだ。

（淫神の飢えが、思ったよりも深刻だ。このままでは、飢えを満たすより先に、母乳が尽きてしまうかも知れない……）

神伽の巫女として、幾多の淫神をその身に封じてきた咲妃は、その加護によって、人の限界を遙かに超える大量の母乳を分泌することができる。

しかし、古代の豊穰神は、そんな彼女をもつてしても満たせぬ激しい飢えに苛まれているようであった。

（かくなる上は、授乳を一時中断して、もつと濃厚な精気を練り込むしかない……一時の不興を買って責められるかも知れないが、神伽をしくじるよりはいい……）

苦渋の決断を下した神伽の巫女は、自らの意思で乳腺を閉ざし、臍下丹田に意識を集中して気を練りにかかる。

「ンンンッ……くふううううンッ！」

強引に乳汁をせき止めたため、排尿を途中で止めた時のような切なくもどかしい感触が、勃起乳首の芯を疼かせ、悩ましげな呻きが漏れた。

「あ……止まっちゃった……」

「おい、出せよ！ ミルク……乳ヲ出せよお〜！」

吸いしゃぶっていた乳首から口を離れた依り代たちが不満げな声を上げ、柔らかな肉果に指をめり込ませてギチギチと捻り上げる。

「くあ！ ああああ……お待ちを……しばしの間、お待ちを……ひぐううう！」

「待てないヨオ！ 飲ませてヨオ！ オッパイ……モットオ！」

「足りねえんだよ、もつと飲んでえんだよ！ 早く出せよ！」

滋味豊かな母乳に酔いしれた若者たちは、分泌の止まった乳首を未練がましく吸い上げ、張り詰めた乳肌を寄つてたかつてこね回す。

「くあ……あふつ！ ンッ……んくううう……はぁンッ！」

責め立てられる乳房の疼きに切れ切れの喘ぎを漏らしつつ、呪詛喰らい師は身体の奥で精気を濃縮し、更に大量の母乳を練り上げてゆく。

「……ねえ、この娘、気持ち良くなるとミルクいっぱい出すみたいだから、みんなでエッチなことしてやろうよ」

ピアスを施された舌で勃起乳首をヌロヌロと舐めしゃぶっていた少女が、唐突に声を上げる。

「えっ、な、何を言って……ひゃうんっ！」

依り代の言葉とは思えぬ俗っぽい提案に目を丸くして問い返す咲妃であったが、射乳を



ガマンしている勃起乳頭をきつく摘まれて、甘い悲鳴を上げてしまう。

「とぼけたってダメ、わかってるんだからア……ほら、乳首がこんなに硬くなってる」  
淫蕩な笑みを浮かべたピアス少女は、唾液にぬめった乳頭を指先で摘み、小さなペニスの様に扱き立てた。

「こうすると気持ちいいんだよね？ さつきも、自分でやってたじゃん」

ネイルアートを施された指先に圧迫された勃起乳頭が、くんつ、くんつ、と小刻みに扱き上げられるたびに、息を呑むような鮮烈な快感が爆乳の芯を突き抜ける。

「ひうんッ！ あ、や……やめ……くううんッ！」

「ほらあ、効いてる効いてる。みんなでおっパイ気持ち良くしてやれば、ガマンできなくなつて、美味しいミルクいっぱい嘔き出すよ」

「そういうことなら……やつてやろうじゃねえの！」

食欲と性欲の入り混じった凶暴な笑みを浮かべ、巨漢と革ジャン男が迫つて来る。

「あんッ！ お待ちを……もう少し間を頂ければ、練り上がりませゆえ、どうかご辛抱を！  
あああうんッ！」

抵抗する咲妃の両腕を男二人が掴み、バンザイの体勢で拘束した。

「ダメえ、辛抱できないよオ……あふ……ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ……」

乳首への巧みな扱き責めを続けながら、ピアス少女は呪詛喰らい師の脇にネットリと舌

を這わせ、嘔き出た汗を舐め取ってゆく。

「んふ……汗もいい香りがして美味しい。脇の下、ツルツルなんだね」

「私も舐める……んふ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……ホント、スベスベでいい舌触り」

反対側の脇の下に舌を這わせたスレンダー少女も、淫蕩な笑みを浮かべて滑らかな肌に頬ずりしてくる。

（飢えに耐えかねた神格が、依り代の意識や感情を前面に押し出して攻めてきたか？

感じすぎると、気を練られなくなってしまう……）

同性ならではのツボを心得た愛撫に悶える咲妃の美貌に、不安の影がよぎった。

気を練る拠点である臍下丹田は、女性の場合、子宮の位置と微妙に重なっている。

それ故、欲情が強まると、気を練り上げる作業に支障が出てしまうのだ。

（だが、クナド神は元々好色な神体。この身を髑られるのも想定の内だ……）

クナド神は、食を司り、台所を守護する豊穰神という側面と、神前乱交のセックスを好む淫蕩な神という二つの顔を持っている。

食宴の場が、肉悦を貪る乱交儀式に変化してもおかしくない。

祀られぬまま放置され、芳醇な精気に飢えたクナド神は、依り代となった若者たちの旺盛な性欲に感化されて、快樂の波動を好む淫神の性格がより強まっているようだ。

（神格が淫神に堕ちきるまえに、何としても神伽を成し遂げる！）

決意を新たにした咲妃は、胸の奥で高まってゆく射乳欲求を抑え込みつつ、臍下丹田に気を集中する。

幸い、結縁の戯が上手くいったお陰で、依り代たちは母乳を吸うことにこだわっているため、下半身には何の愛撫を仕掛けられていない。

「ねえ、私のオッパイも、吸ってくれる？」

脇の下や下乳のラインを甘噛みしつつ、勃起乳首を指先で撫で転がしていたスレンダー少女が、チューブブラをズリ下げ、起伏の乏しい胸をあらわにする。

剥き出しになった貧乳バストは乳首も小振りで、まるで少年の胸板のようだ。

「んふ……お姉さん、オッパイの吸い合い、しよう……」

まだ幼さの残る顔に淫らな笑みを浮かべた貧乳少女は、咲妃の頭側に回り込み、上体を倒して、薄い胸板を口元に押しつけてくる。

「んッ……んふ……」

しつとりと汗ばんだ素肌と、小さいながらも硬く尖り勃った乳首が呪詛喰らい師の唇に触れた。乳房の弾力はほとんど感じられず、柔肌のすぐ下に繊細な肋骨のコリコリした感触が感じられる。

「ねえ、吸って……いっぱい舐めて……」

咲妃の乳首に唇を触れさせたまま、貧乳少女が愛撫をねだった。

「ンッ……ちゅっ……ちゅば、ちゅば、ちゅば……ぴちや、ぴちや、ぴちや……」

求められるがまま、神伽の巫女は貧乳少女の乳首を吸い、舌をくねらせて奉仕する。

円を描いて乳輪を舐め回し、唇をすぼめて乳頭を吸引すると、小さな乳首はツン、と尖り勃つて歓喜に震える。

「あはんっ！ お姉さん舐めるの上手……私も舐めて上げる。んっ、んふ、あむ、ちゅばちゅばちゅば……」

心地良さげな声を上げた貧乳少女は、咲妃の爆乳を両手で鷲掴みにして搾り上げつつ、ざらついた舌の表面と、ヌルヌルした舌裏で交互に乳頭を舐め弾き、緩急付けた吸い上げを仕掛けてきた。

「ひあ！ あっ、ヒッ、ふあ……んくううう……ッ！」

先ほどまでの貪欲な吸飲とは打って変わった、あからさまな愛撫を勃起乳首に施された神伽の巫女は、ボンテージ裸身をくねらせて反応してしまう。

「お姉さん、感じて……もっと、感じさせて上げる」

敏感な反応に興奮した少女の愛撫が激しさを増した。

貧乳少女の口の中で、乳首がひときわ硬く尖り勃ち、ビクッ、ビクンッとしやくり上げて、少量の乳汁を迸らせる。

「んふ、ちゅばっ……。ちよつとだけ出た。ねえ……囁んで。私の乳首も囁んで……」

「んは、ああ……あむ……んふ、はむ、んっんっ……コリッ！」

淫らな要求に応えて、小さな勃起乳首に歯を立てて嘸んでやると、スリムに引き締まった少女の裸身が快感に震えた。

「ひあ、あつ、あんッ！ 気持ちいい……もつとお、もつと嘸んでえ」

貧乳少女の胸郭内で甘い声が反響し、喘ぎとともに吐き出された喜びの涎が、咲妃の爆乳に熱く染み通って官能の炎を燃え立たせる。

「んは、あむ……ちゅばちゅば……」

「はう……んふ、おつきいオッパイ……美味しい……」

元々レズっ気の強い爆乳退魔少女と、スレンダーボディの貧乳少女は互いの乳首を甘噛みし合い、込み上げるマゾ快感に身を震わせた。

（このまま、一回絶頂させてやろう……）

とどめの愛撫を仕掛けた咲妃の前歯が少女の薄い胸板に浅く食い込み、乳輪の周囲に幾つもの歯形を刻印する。

限界まで感度を増した小さな勃起乳頭を甘噛みしつつ、コリコリに尖った先端で舌先を舞い踊らせると、細く華奢な貧乳少女の肢体が切羽詰まった痙攣に包まれた。

「あはあん……嘸まれるの……きもちいい……アッ、イクッ、イクッ、きゅふうふうンンンッ！」

咲妃のテクニクに翻弄され、乳首愛撫だけで絶頂に舞い上がった貧乳少女は、押し殺した呻きを上げて痙攣しながら、膝から崩れ落ちて床に突つ伏す。

「凄いね、乳首舐めただけでイかしちゃった。じゃあ、次はアタシの番。……見てえ、こんな床に落ちてたあ」

ニヤリ、と微笑んだピアス少女の手には、銀色に輝くフォークが握られていた。

三つ又に尖ったステンレスの切っ先が、炎を照り返して、ギラリ、と凶暴な光を放つ。

「ほらあ、ミルク出しなよお……きひやひやひやっ！」

サデイスティックな笑い声を上げたピアス少女は、フォークの先でボリユームたつぶりの乳肌を撫で回し、痛悦入り混じった刺激を送り込んできた。

「つあ！ あっ……ンッ……あ、はああう……くうううん……ッ！」

仰向けになっても型崩れせず、天に挑むかのように突出した色白な乳肌に、薄紅色の掻き痕を三筋残しながら、ステンレス製の愛撫凶器が這い回る。

「ねえ、感じる？ 感じてるんだよねえ、オッパイの大きなお姉さん……」

爆乳の曲面を隅々まで這い回ったフォークは、焼きたてのパンケーキのように盛り上がった乳輪に到達し、艶めかしいピンク色に色づいた乳頭の周囲をクルクルと旋回して玩弄する。

「ひあ……あ……あ……あ……あんッ！」

硬質な刺激に美貌を歪め、身を強ばらせる咲妃の乳先で、フレッシュピンクの乳首が更に硬く尖り勃つ。

「ほおら、またボッキしたあ。ホントにマゾなんだ……。おつきくて美味しそうなマゾオッパイ、ちよつと突いちやおうかなあ」

ピアスを施された舌を突き出して、ヌロリ、と舌なめずりした少女は、乳先を掻き撫でていたフォークの先端にジワリ、と力を込めた。

「つあ！ そつ、それは……。やつ、ひああうッ！」

三つ又の尖りが、艶やかなピンク色の乳輪にめり込み、疼き尖った乳首をなぎ倒しながら掻き撚ると、痛みと表裏一体になった硬質な快感の波紋が全身に拡がり、調理台の上で汗に濡れ光るボンデージボデイが弓なりに仰け反ってゆく。

「あはあ、身体中ビクビク震えてる。オッパイ突かれてこんなに感じちゃうなんて、筋金入りのマゾ女だねえ」

ピアス少女の言うとおりだった。

指一本触れられていない肉感的な太腿が調理台の上で切なげに擦り合わされ、革帯ボンデージを深々と啜え込んだ秘裂とヒップが断続的に跳ね上がる。

「エッチな声と顔……。ほらあ、オッパイの奥まで突っ込んであげるよオ！」

溜め込まれた乳汁の圧力で今にも弾けてしまいそうな勃起乳首が、フォークの切っ先に

深々と押し込まれて乳肉に埋没した。

「ふああ！ 奥ッ！ 刺さる……刺さるうッ！」

引きつった声を上げた咲妃の爆乳が、耐えがたい疼きに包まれて苦悦に打ち震える。

ぷしゅっ！ ぷちゆるっ！

圧迫に屈して漏らした少量の乳汁が、カルデラ状にめり込まされた乳先の窪みを満たし、爆乳の曲面を流れ落ちてゆく。

「勿体ない……んふ……ずちゆるるッ！ んふ……おいひい……」

フオークをめり込ませた乳先にリングピアスを施された唇を寄せた少女は、窪みに溜まった母乳をすすり飲む。

「ねえ、もつといっぱいミルク出してくれないと、このままオッパイに穴開けて中身吸っちゃうよお」

乳先に深くめり込んだフオークがゆっくりと左右に捻られた。

ぎゅりっ……ぎちっ……ぐぎゅりりいいッ！

柔らかな乳肉が三つ又の凶器に巻き込まれ、らせん状に振り責められる。

「つあ！ ああああああッ！ 乳首が……ねじ切れるッ！ やっ、やめ……あひいいいッ！」

どこか艶めかしい響きを帯びた悲鳴を廃レストラン内に響かせ、ボンデージ裸身が硬直



した。

ぴしゅっ！　ぷびゆるるッ！

乳輪ともども爆乳内部に押し込まれた勃起乳首が水鉄砲のように母乳を噴出し、滑らかな素肌に脂汗がドッ！と吹き出して、炎のオレンジ色をヌラヌラと照り返す。

「また出たあ！　甘くて美味しいミルクと、ほんのり塩味でエッチな匂いのする汗……どつちも美味しい。んふ……ぷちや、ぷちや、ちゅば、ぬろっ……」

乳房の先端に突き立てたフォークを左右に捻りながら、母乳の滴と汗粒を交互に舐め味わう。ピアス少女。

「おい、あまり無茶すんなよ……せつかくの供物に傷が付くだろうが！」

ドスの利いた声を上げた巨漢が、ピアス少女の手からフォークを取り上げ、遠くに投げ捨てた。

「あんッ！　何すんのヨォ！　いいトコだったのに！」

「黙れ！」

太った男の一喝で、サディスト娘は目を見開いたまま身体を硬直させてしまう。

彼女だけではなかった。貧乳少女と革ジャン男も、ビデオの一時停止でもしたかのように動きを止めている。

「あちゃあ、みんな止まっちゃった。力の加減がわかんねえな」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**